

東京バッハ合唱団 月報

[第 598 号] 2012 年 4 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.598

April 2012

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

バッハの受難曲と福音書

(公開レクチャー・レジュメ)

小海 基 (荻窪教会牧師、合唱団員・団友)

はじめに：「受難劇」の台本を書いてみて分かったこと

現在の聖書学の世界では、4つの福音書それぞれに食い違いや相違、特色があることは当然で、そのように違いが出る背景には、各福音書を編集した人たちの歴史的・時代状況と、神学の違いが関係していると判断することは常識です。それぞれの特色と意図を明確にしていく研究を「編集史」と呼びます。逆に食い違いを超えて、そもそもの「史的イエス」の時はどうだったのか遡れるかということ、それは(「様式史」と呼ばれる研究方法なのですが)なかなか困難であると言われています。

東京バッハ合唱団50周年記念にバッハの4大作品を一挙に歌っていくというのは意義深いプロジェクトです。とくに2つの受難曲の違いを比較し、意識して歌い込んでいく意義というのは大きいと思います。マタイとヨハネの2つの福音書の特徴は何かという問題の中で大変に困ることは、キリスト教の歴史の中でこの2つの福音書が「ユダヤ人差別」を助長した元凶となる聖句を持っている問題です。

私は2008年3月20日、阿佐ヶ谷教会で開催された第9回日本基督教団西東京教区全体研修会で300名近い参加者全員を巻き込む形の「受難劇」台本を書くという、牧師人生でも稀有な経験をしたことがあります。やってみてこそ分かったことは、4つの福音書の受難記事の劇的なところ、絵になるところ、良いところを切り取って組み合わせを行っても、受難の真実に近づけないばかりか、変な偏見(歴史的・影響的に言えば「ユダヤ人差別」や「ローマへのすり寄り」と言ったもの...)を増長させかねないというジレンマを抱えることになるということです。

2004年に再発見され、2006年以降マスコミで話題になったグノーシスの偽典「ユダの福音書」のことは皆さんもご存じでしょう。「ユダの福音書」でユダは裏切り者でなく、主イエス・キリストの救いの意図を最も深く理解し、実行した一番弟子として描かれています(K・バルトの『教会教義学』のユダ解釈と大変よく似ています)。この再発見が改めて問いかけたのは、2000年にわたるキリスト教史が、他の11弟子も含めて全員が裏切ったにもかかわらず、ユダにだけ「裏切り者」の汚名を着せ、「ユダヤ人」にだけイエス・キリストの

「血の責任」(マタイ 27:25)を負わせる事の問題(いわゆる「ユダヤ人」問題)です。

実はそれは非聖書的な、ねじ曲がり拡大させられたキリスト教神学で、その果てに第二次世界大戦の 아우シュヴィッツを始めたとする強制絶滅収容所を生み、21世紀も報復の連鎖を続けているユダヤ教、キリスト教、イスラム教という、同じ出自の聖典をもつ3大宗教の中で戦火が絶えない元凶となっているのです(多様なユダ解釈像については、大貫隆編『イスカリオテのユダ』日本基督教団出版局2007参照)。

1. オーバーアマーガウ受難劇における「ユダヤ人問題」 (受難劇台本改訂事件)

バッハの受難曲のルーツには受難劇があります。合唱団のみなさんの中にも、ペストからの救いを祈願して1634年に開始されたこの受難劇(オーバーアマーガウ。ミュンヘンの南西約70Km)をご覧になった方がいるでしょう。1680年以降、10年ごとの開催となり、その中で「裏切り者ユダ」像や「ユダヤ人差別」が増幅されていった歴史については、宮田光雄著『いのちの証人たち 芸術と信仰』(岩波書店1994、192~215頁)や、川端純四郎著『J.S.バッハ 時代を超えたコントロール』(教団出版局2006、175~8頁)に紹介されています。

<お知らせ>

合唱と福音書朗読による、コンサート

「(マタイ受難曲)、入門の入門。」

日時 5月19日(土)14:00開演

会場 荻窪教会(日本キリスト教団)

[入場無料](座席に限りがございます。お早目にお越しください。13:15開場)

・東京バッハ合唱団(合唱と朗読)

・金澤亜希子(オルガン)

・大村恵美子(指揮/訳詞)

創立50周年記念懇親会

日時 7月8日(日)14:00開会

会場 アルカディア市ヶ谷(私学会館)

・記念講演：笠原芳光氏(宗教思想史、団友)

来月号「月報」にて、詳細をご案内します。
ぜひ、今からご予約ください。

台本にはイエス・キリストを銀貨 30 枚で売り渡したユダが悔いて自殺に走る場面で、4 つの福音書のどれにもないような独白の台詞を書き足して、「ユダの裏切り」を強調しています。ペトロなどの他の弟子たちの否認、裏切りには観客は思いを寄せて重ね合わせることができるのに、「ユダの裏切り」だけは特別です。突き放すのです。この受難劇がナチ政権下ではゲッペルスの指導によりさらにその傾向が助長されます。イエス役は青い目のブロンドで上着にハーケンクロイツを付けること、弟子たちもアーリア的ゲルマンタイプであること、ユダは明確なユダヤ人タイプであることが指示されるようになります。オーバーアマーガウの住民の 6 割がナチ党员であったこともあり、この受難劇はパイロイトと並んでナチの広告塔と化していくのです。

こうした傾向は戦後、特に 1960 年代末の第二ヴァチカン公会議以降問題になり、90 年版では「血の責任」(マタイ 27:25) 発言のところでは、群衆こぞってではなく一部が声を挙げる、前口上を変えるとといった改訂がなされました。ユダヤ人皆が悪いのではなく、一部の人が悪かったのだという意味の変更です。そんな甘口ではいけないというわけで、更に 2000 年版ではもっと大幅な改訂がなされましたが、まだまだ不十分だとユダヤ人側から批判され続けています。

こうしたことはバッハの受難曲の台本ではどうなっているのでしょうか。

2. バッハの時代前後から 4 つの福音書で「受難曲」が作られるようになった

バッハ自身はラインハルト・カイザー(1674-1739) の《マルコ受難曲》(18 世紀初頭) をモデルにしたと言われています(杉山好「ヨハネ受難曲」の特異性、東京バッハ合唱団、第 71 回定演プログラム解説、創立 30 周年)。こうした受難曲のジャンルを「オラトリオ受難曲」形式と分類するらしいのですが、このあたりの時代から 4 つの福音書それぞれに「受難曲」を作ることが始まります。4 つのパターンで 4 年間違った受難曲が上演できるというわけです(そういう点ではヘンデルの《メサイヤ》の方が形式的には古いのですね)。

となるとそれぞれの福音書の特色を自覚して組み立てるといふこの姿勢は、現代の聖書学の「編集史」的方法とよく似てくるわけです。受難劇時代のように各福音書の調停・調和を図るのでなく、それぞれの違い・特色を際立たせるところに積極的意味を持つというわけです。ただし、その場合に問題の「ユダヤ人差別」はどうなるのか。

困ったことにいわゆる「ユダヤ人問題」は既に福音書のテキストの段階で存在します。例えばユダ像の違いがあります。マルコではユダヤ教当局者から銀貨 30 枚の提供が約束される。マタイはユダの方から金を要求(ユダの裏切りの強調)、ルカはサタンがユダの中に入る。ヨハネはもっと早い段階でユダと悪魔を結合さ

せている(ヨハネ 6:66-70)。マルコを除いて皆それぞれ「ユダ=裏切り者、悪魔の働き」像を増幅していることが明瞭です。

そもそもイスカリオテのユダの名は新約聖書に 22 回出てきます。一番多いのがヨハネで 8 回、二番目がマタイ 5 回、ルカ 4 回、マルコ 3 回、使徒言行録 2 回。その中でユダの死まで描いているのはマタイ(呪われた自殺)とルカ(使徒言行録冒頭、凄惨な事故)のみといった具合です。

そして福音書を自分の目で読まれる方なら皆さんお感じになると思います。「ユダ=裏切り者、悪魔の働き、諸悪の根源」像はリアリティーを欠くのです。5 つほど理由を挙げます。当局はそもそもユダに依存する必要などなく、全員逮捕すればよかった。なまじ弟子に手引きさせる方が裏切られる可能性が高い。

当局は主イエスの動向をつかんでいて、面も割れており、ユダに手引きしてもら必要などない。ユダに裏切りの動機がない。財政を任されていたほど信頼されていた。報酬の銀貨 30 枚はあまりに安すぎる。管理を任されている財産をくすねた方がまだまし。日夜寝食を共にしてきた他の弟子がユダの裏切りを予知できなかった。「しようとしていることを、今すぐしなさい」(ヨハネ 13:27) というユダに対する主イエスの

言葉は、本当はナジル人の誓願をイエス自身を立てているゆえの言葉ではないのか。

これをマタイやルカやヨハネの教団という原始キリスト教団がユダの裏切りとして拡大していった背景には、ユダヤ教との分離(特に AD70 年のローマ軍によるエルサレム神殿崩壊に際し、キリスト者がユダヤ戦争に参加しなかったためにヤムニヤ会議で定められた 12 祈禱文の中で異端への呪いの祈願が定められた。ヨハネ福音書の中に共同体から「追放される」という表現が多いのはその時代背景と深く関連している。マーティン仮説)の背景があります。

その他に「ユダの物語は 憎しみの必要 で説明できる」とするマルガレート・プレート仮説も注目に値します。福音書を生み出していった生前のイエスと直接出会った世代がほとんど姿を消しつつあった第 2 世代の初期キリスト教会は次のように考えたというわけです。「自分にとってユダへの憎しみこそは、自分が主を愛していることを証明する最も望ましい、いや、おそらく唯一の形だと思ふ者が少なくないのである。多くの者が、主によって要求されている柔和、心の清さ、温和さという心情をもって主の後に従うことで、主への愛を行うことが自分にはもう難しいと感じている。しかし、裏切り者であり、イエスの敵であるユダを本当に憎む憎しみならば、そのような者たちもまた一緒にあって奮い起こせるといふわけである」(大貫隆『イスカリオテのユダ』242 頁)。時代が下るにつれ「ユダ」と「ユダヤ人」はかぶさっていきます。マタイによる福音書にだけ出てくる問題の聖句「その血の責任は、



我々と子孫にある」(マタイ 27:25)が、その傾向を決定的にしてしまうのです。

初期キリスト教の異邦人キリスト者たちは本来「この人の血について、私には責任がない。お前たちの問題だ」と言って群衆の前で手を洗ったポンテオ・ピラトの名を残そうとしました。それが使徒信条の「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」という告白です。それはイエス・キリストを裏切り、十字架に掛けた罪は、ユダヤ人のものでなく他でもない異邦人キリスト者に関わっているのだという罪責告白だったはずなのです。それが時代が下るにつれてどんどんイスカリオテのユダヤユダヤ人たちのせいになっていくのです。

神学校で私たちは習ったものです。ヨハネによる福音書をそのまま注釈なしに講解説教していったら自然に「ユダヤ人差別」論者を生み出しかねない内容を持っている(前述のマーティン仮説の歴史背景の為)。ヨハネによる福音書で「民衆(民)」はニュートラルな存在、「世」はやや悪い、「ユダヤ人」は敵対者として使い分けられています。それはヨハネによる福音書の成立した時代背景が影響しています。ヨハネの時代のキリスト教会は、ユダヤ教から呪いの祈禱をささげられ、迫害を受け、社会から「追放され」ていた弱者であり、少数者だったのです。それをそのままイエス・キリストの史実そのものであるかのように、キリスト教が多数派、大勢派となり、ユダヤ教が弱者、少数派と逆転してしまった中でも語ったり演じたりすれば、それは「ユダヤ人差別」、「ユダヤ人迫害」に積極的に加担してしまうことになるわけです。



3. マタイ、ヨハネ両福音書、受難物語の相違点

次の点がマタイとヨハネの両受難物語の主な相違点(数々あるが特徴的な物)です。

A) 受難の日付が違う: マタイは「ニサンの月の15日、金曜日」、最後の晚餐は過越の食事(「ニサンの月」はユダヤ暦の年初の月)。ヨハネでは「ニサンの月の14日、木曜日」、最後の晚餐は過越の食事ではない。

マタイの日程だと臨時の議会(サンヘドリン)招集で裁判・死刑をしていくことは実質上無理。極刑裁判は祭りの期間中には行えない(ミシュナ、ただし編纂年代はAD200頃)。イエスの宗教行事日程がクムラン・エッセネ派のように主流ユダヤ教暦と違っていたのかもしれない(?)。

B) 12弟子がゲッセマネでイエスを去った状況: マタイでは逃げ去った。ヨハネではイエスが去るように促した。

C) 裁判内容: マタイでは、大祭司カイアフアにより「冒瀆罪」。しかし「メシア(油注がれた者)」と自称しても冒瀆罪にはならない。「神の子」が神的表現とされるのは1世紀後半の異邦人キリスト者の間でのこと。

ヨハネでは、アンナス、カイアフア、ユダヤ人法廷に死刑を下す権利があるかが問題となりピラトへ。ヨ

ハネでユダヤ側の尋問が記録されていないことが現在ドイツで注目されている。

D) 十字架に立ち会った人々: マタイではガリラヤ出身の女性たち。ヨハネではガリラヤ出身の女性たちに加えて、イエスの母、愛弟子。

E) イエスの埋葬者: マタイではアリマタヤのヨセフ。ヨハネではアリマタヤのヨセフとニコデモ。

F) イエスの最後の言葉: マタイ「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」(ヘブライ語)。詩22編説は遠藤周作『イエスの生涯』、E.シュタウファー『イエス・その人と歴史』、もっと前の19世紀からあったという説もある(U.ルツ『マタイのイエス 山上の説教から受難物語へ』)。これに対し青野太潮『十字架の神学』をめぐって』は逆説の極みの言葉と解釈。マルコは「エロイ、エロイ...」とアラム語で表記。

ヨハネでは「成し遂げられた」(これは十字架の痛みがあまりにもなく「仮現的」と昔から批判される)。《マタイ受難曲》では、常にイエスのレチタティーヴォに重ねてあった弦楽(「光背」を示しているといわれる)がここでだけ消える。逆説の極みの中で、どん底の叫びの中で死ぬという表現なのか?

G) ピラトの妻: マタイではピラトの妻が自分の見た夢の故に死刑にしないよう説得。カトリックでは聖人になる。

H) 罪状書: マルコ「ユダヤ人の王」、マタイ「これはユダヤ人の王イエスである」、ルカ「これはユダヤ人の王」、ヨハネ「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」をヘブライ語・ギリシア語・ラテン語の3通りに。この罪状書きが4つの福音書を生み出したそれぞれの教会の背景の違いをよく示している。

I) 百人隊長の告白: マタイでは、神殿の幕が裂け、地震、岩が裂け、聖人のよみがえり...により兵士たちも一緒になって告白。ヨハネは脇腹を突き刺し、告白なし。復活の時の証明。マルコは「エロイ、エロイ...」だけで百人隊長が告白(青野太潮的?)。

4. バッハはこれらをどう料理しているか

キリスト教の歴史の中で、受難週ごとにポグロム(迫害)はヨハネとマタイの聖句によって繰り返されました。シナゴークが焼打ちにあい、略奪殺害が繰り返されたといえます(川端純四郎著『J.S.バッハ 時代を超えたカントール』)。《ヨハネ受難曲》にはまだその痕跡があるようです(ホフマン・アクストヘルム)。21~23曲はバロックの「かたくなさ」の音型がユダヤ人たちの合唱に使われています。ただし、バッハは福音書聖句に更に足して「反ユダヤ主義」をあおる台詞・句・コラールは採用しませんでした。ただ「この世の人」と改変すればよいところを聖句通り「ユダヤ人」としているだけ。聖書の言葉には手を付けませんでした。《ヨハネ受難曲》には2箇所マタイ福音書の引用があるが、これも「反ユダヤ的」箇所ではありません。

《マタイ受難曲》の方にはあまり「反ユダヤ的」イメージが感じられません。問題の聖句は歌われているにもかかわらずです。それは直後に歌われる「主よ、あなたを十字架にかけたのは、私です」(大村訳 しかり そは われなり)というゲルハルトの個人的、敬虔的、告白的コラールの詞の強い効果のおかげ《マタイ》は 10 や 37、《ヨハネ》は 11 で《マタイ》の 37 を 2 回繰り返す！) だと思います。

当時のライブツィヒはユダヤ人の居住は認めないが、大商品見本市(メッセ)でユダヤ人商人たちは大手を振って活躍した町でした。ドレスデン宮廷は「宮廷ユダヤ人」の存在・居住を許していました。《マタイ》のユダのコラールは「放蕩息子」としてユダを描き、ゲッセマネの祈りの後の 19 のレチタティーヴォとコラールも、裏切り後の第 1 部の終局のコラール 人よなが罪に泣け も(誰か他の人のというのではなくほかでもないこの)「私の罪の故に」という主題が強調されています。問題のマタイ 27 章 25 節の後は少し意味深な「厳しい沈鬱な、何かだめ押しをするような音楽」(川端純四郎)を付けていますが、これはどう解釈するかは指揮者・解釈者としての大村恵美子先生の課題になるでしょう(川端はバッハの中で「反ユダヤ主義」的なカンタータは 46 番だけ?とするけれど、これも異論があるかもしれません)。

いずれにせよバッハの《マタイ受難曲》蘇生演奏を果たしたのはユダヤ人であるメンデルスゾーンでした。このことは、少なからず《マタイ受難曲》をロマン派の時代のユダヤ人社会がどう受け止めていたかを反映しているはずで、1988 年までイスラエルではバッハの受難曲上演は禁じられていましたが、現在は《マタイ》、《ヨハネ》両方とも上演できることになっているということも、バッハは当時の人としてはかなり自覚的に反ユダヤ的にテキストを展開しなかったことが評価されてのことだと思います。

(2012 年 3 月 3 日、荻窪教会にて)

バッハ 4 大合唱作品[日本語]連続演奏 第 2 シーズン、参加予定の皆様へ

- ・2012 年 11 月公演(第 107 回定期演奏会)
(クリスマス・オラトリオ) - + カンタータ BWV71
- ・2013 年 3 月公演
(マタイ受難曲)(第 108 回定期演奏会)

4 月以降に、新たに練習参加を予定していらっしゃる皆様は、今冬の《クリスマス・オラトリオ》、来春の《マタイ受難曲》いずれも、まだ練習回数がじゅうぶんにありますので、いつでも合流してください。お待ちしております。

《クリスマス・オラトリオ》(第 107 回定期)
下記スケジュール表のとおり、《オラトリオ》(前半、
-) + カンタータ BWV71 の練習は、5 月 21 日から
始まります。使用楽譜(新バッハ全集版)の準備も
きていますので、早い時期にいちど練習場にお越し
ください。とくに旧団員の方で、かつてペーター版
をお使いになっていた方は、歌詞付けはほぼ同じ
ですが、ページ組み、ピアノ編曲ともに異な
っていますので、ご注意ください。夏の野尻湖
合宿(8/2-5)でも、《オラトリオ》前半を
抜粋で取りあげ、9 月からは仕上げの段階
にはいり、11 月本番にのぞみます。

《マタイ受難曲》(第 108 回定期)

公演の順序は前後しますが、《マタイ受難曲》は練習すべき楽曲数が多いので、先行して練習を開始しています(前期:1 月~5 月)。5 月 19 日の抜粋公演をもって中断しますが、新規参加者の便宜のために、「夏季集中練習」(4 回)を用意しています(8/11、18、25、9/1(土)各 13:00 - 18:00、荻窪教会)。後期練習は、第 107 定期終了後の 11/10 に開始します。

東京バッハ合唱団創立 50 周年の今年は、年間をとおして、《クリスマス・オラトリオ》(前半)と《マタイ》の練習に明け暮れます。さらに、つづく来シーズンには《オラトリオ》の後半と《ヨハネ》が待っています。バッハの大曲をまとめて取り上げる、はじめての(そして多分、最後の?)貴重な機会です。「降誕」と「受難」における、バッハの福音書解釈をじっくりと味わってみましょう。多くの有志のご参加を期待しています。

事務局までお気軽にお問い合わせください。

練習スケジュール

:《マタイ受難曲》練習、 :《オラトリオ》+ BWV71 練習

4 月	(1 月~)《マタイ受難曲》前期練習
5 月	5/19(土) 荻窪演奏会《マタイ受難曲》抜粋 5/21(月)から《オラトリオ》+ BWV71 練習
6 月	" "
7 月	" "
8 月	8/4(土) 野尻湖コンサート《オラトリオ》抜粋 8/11, 18, 25, 9/1(土)《マタイ受難曲》集中練習
9 月	9/3(月)から《オラトリオ》+ BWV71 練習
10 月	" "
11 月	11/9(金) 第 107 回定期演奏会 11/10(土)から《マタイ受難曲》後期練習
12 月	" "

2013 年(年末-年始休み)

1-2 月	" "
3 月	3/30(土) 第 108 回定期演奏会
4 月	4/1(月)から次シーズン《ヨハネ受難曲》練習